

上 林 暁 伝 記 考

— 第五高等学校時代 —

永 田 哲 夫
(人文学部 国語学国文学研究室)

A Study of the Life of Kanbayashi Akatsuki

— His Days at the Fifth High School —

Tetsuo NAGATA

1. 五 高 入 学

高知県立第三中学校（大正11. 4 中村中学校と改称。現、中村高等学校）の4年を終了した上林暁は、父、徳広伊太郎のすすめに従って松山高等学校を受験した⁽¹⁾。大正9年7月である。この頃からすでに作家志望であった彼は、将来、大学の独文科へ進学するつもりで文科乙類を選択して受けたが失敗。翌10年3月、第三中学校を卒業した。暁の席次は、第17期の同期生26名中8番である。次の成績表は彼の卒業時（第5学年）のものである。これを記載したのは、氏のご承諾を得ていることであり、かつ、当時の中学校の教科課程を知るうえで参考になると考えたからである。

学 科	修 身	国 語 及 漢 文				英 語			歴 史	地 理	数 学			物 理 ・ 化 学		法 政 経 済	図 画	体 操	約 点
		国 語	漢 文	作 文	習 字	訳 読	作 文	習 字			代 数	幾 何	三 角 法	物 理	化 学				
成 績	60	87	87	84	92	89	91	86	83	85	90	79	71	76	65	79	85	81	

英語の成績がよいのは、大学の英文科へ進学するようになる下地があったといえようか。代数、幾何の成績もよい。理数にたけていた父の影響が考えられる⁽²⁾。

暁は、大正10年4月、第五高等学校文科甲類に入学した。当時としては遠隔の熊本をなぜ選んだのか。その動機はいまひとつ明白でない。強いて推測すれば、

- 1 地元の高知県には、高等学校が設立されていない。（大正12年4月開校）
- 2 隣県の松山高等学校は、前年に失敗している。
- 3 熊本には、第五高等学校、熊本高等工業学校、熊本医学専門学校等があり、それぞれに高知県出身の学生が在学している。
- 4 「熊本は明治以来、土佐とは縁故の深い土地で、軍人や教師や学生など、相当沢山な土佐人が行っていた⁽³⁾」

ことなどがあげられる。もっとも、暁自身は次のように語っている。

現在の中村市で産婦人科医をしてゐる田所豊博士⁽⁴⁾は中学の先輩で、その頃やはり熊本の医専へ行ってゐた。私は田所さんを頼って、熊本へ行ったのだった⁽⁵⁾。

同じ中学の4期先輩の田所氏を頼って、土佐とゆかりの深い熊本の地を選んだということが、五高受験のおおよその事由であろうか。入学後、新入寮生の歓迎会の席上で、「西南の役に熊本城を守った谷干城も土佐の先輩であります」と自己紹介して溜飲を下げているところなどからも、その

間の事情をうかがうことができる。

大正10年11月9日、吉岡郷甫校長は浦和高等学校へ転任し、後任には、第四高等学校長の溝淵進馬が任命された。溝淵校長は土佐出身であった。明治3年12月25日、高知県長岡郡大桶村（現、南国市）に生まれ、県立尋常中学校（現、高知追手前高等学校）を卒業後、第三高等学校へ進んだ。28年、東京帝国大学文学部哲学科を卒業して、母校である高知県立尋常中学校教諭になり、1年半後に第二高等学校教授、その後、千葉県立中学校校長などを歴任。明治32年8月から3年間、ドイツ、フランスへ留学した。

新任校長について暁は次のような回顧をしている⁽⁶⁾。

溝淵先生は謹厳でおっかない感じだった。熊本へ来任せられて間もなく、一晚、土佐出身の五高生が打揃って、校長官舎へお訪ねしたことがあった。溝淵先生は四高の柔道部を興隆して、全国に覇を唱へさせたのだったが、五高に来てからも、自分で陣頭に立って鼓舞指導してゐた。夏目漱石が大学の寄宿舎にゐた時分、隣の室に溝淵進馬だとか浜口雄幸だとか土佐出身の学生がゐて、朝から晩まで議論ばかりしてゐて喧しくてたまらなかつたさうである。

先にも書いたように、熊本には多くの土佐人が在住していたため「土佐会」と称する一種の連絡親睦会が作られていた。溝淵進馬が五高の校長に迎えられからは、当然、会長の任に当たることとなり、副会長には五高の教頭をしていた岡上梁が選ばれた。じつは、岡上教頭も土佐人であった。長岡郡大篠村（現、南国市）の出身で、東京帝国大学文学部哲学科を明治36年に卒業し、石川県立第一中学校教諭を振出しにずっと教育畠を歩いて来た人である。もう一度、暁の回顧を引用する。

岡上先生は骨張った厳つい顔をして、顎髯を生やしてゐた。古武士のやうだったが、事実剣道の達人のやうだった。私達は論理学概論を教はったが、旧式で、かへって面白かつた。

この2人の他に、金山直晴という27・8歳の英語の先生も土佐出身であった。暁にとって生まれ始めての異郷の生活とはいえ、熊本から出京したばかりの三四郎が、動く東京の真中に閉じ込められて体験した驚愕と不安は少なかつたのではあるまいか。周囲には多数の同郷人がいるし、土佐と共通な風土性を具えた熊本における高校生活は、苦艱とは裏腹に、家門の祝福と入学の感激に満たされて開幕したと考えられる。

〔注〕

- 1 松山高等学校は、大正8年に設立され、当時、四国内では唯一の旧制高等学校であった。また、この時期には、中学校第4学年修了者の受験が法令で認められていた。
- 2 徳広伊太郎の高知師範学校（簡易科）在籍時の成績表をみると、理数系の科目によい点がつけられている。
- 3 「熊本土佐会の思ひ出」。
- 4 中村中学校の第13期卒業生。中村市内で産婦人科病院を開業していたが、のち、高知駅前病院に勤務。昭和51年9月9日没。
- 5 「熊本土佐会の思ひ出」。
- 6 同上。

2. 習学寮の生活

暁は五高入学と同時に習学寮（寄宿舎）に入った。「新ニ入学シタル者ハ、少クモ一学年間ハ総ベテ習学寮ニ寄宿スベキモノトス。但シ特別ノ事情アル者ニ対シテハ、詮議ノ上通学ヲ許可スルコトアルベシ⁽¹⁾」と定めた学則に従ったものであろう。割当てられた3寮15室は、2階の中央階段からちょっと右寄りの部屋であった。同室者は大分県中津中学校出身の曾我憲平であった。

入寮記念に暁は芥川龍之介の短編集『夜來の花』を買った。彼の芥川傾倒は中学時代にさかのぼる。暁が初めて読んだのは、「片恋」と題する大正6年10月特大号の『文章世界』に発表された短

編小説である。前年の2月の『新思潮』に掲載された「鼻」が、夏目漱石の激賞を受け、一躍新進作家として文壇の脚光を浴びたことはいまさらいうまでもない。

芥川の華やかな登場は、「秀抜な学才、巧緻な表現の持ち主」として、「文学にめざめた田舎の少年（上林…筆者注）の耳にも伝はって来た⁽²⁾」のである。しかし、この時期の暁は芥川の博識ぶりに憧れ、繊細で感覚的な文章に新鮮味を覚える程度であった。

ところで、暁の入寮当時の生活の一端が「耶馬溪の墓」・「淋しき足跡」に描かれている。上林と曾我は夕食がすむと毎晩夫婦のように連れ立って、梧桐の街路樹の並んだ街へ出かけた。

僕たちは勉強もせず、早くから蚊帳を吊って寝ながら二十歳の青年らしい話に耽った。臨時試験もほったらかして早寝をしてみると、寮総代の松岡平市氏が点検して歩きながら「もう寝たんですか、頑張らんですか」と声をかけて行ったこともあった。（「耶馬溪の墓」）

曾我は西田幾太郎の「善の研究」、倉田百三の「愛と認識との出発」などを愛読する哲学青年であり、かつ、高群逸枝の詩に心を寄せる詩人でもあった。暁は芥川龍之介の小説や久米正雄の戯曲に浮身をやつす文学青年であった。

2学期には4寮6室へ移っている。この部屋は広くて同室者は6名に増えた。

藤井利彦	小倉中学校出身
田中 定	福岡県八女中学校出身
松延七郎	同上
三橋則雄	釜山中学校出身
曾我憲平	中津中学校出身
徳広巖城	高知県第三中学校出身

上記6名中、曾我憲平は2年の夏期休暇中に腸チブスで死亡し、藤井利彦は高等学校卒業間際に亡くなるという二重の不幸に出会うことになる。が、ともかく、2学期の間は和気あいあいとした交友関係が続いた。この時分の暁の風采や文芸活動について、美作太郎は次のように回想する⁽³⁾。

同級生の中に、上林暁がいた。いや、高知から出て来た徳広巖城（いわき）という男がいたという方が事実合っている。その名に似合わず、いかついところがなく、陽気で、気さくで、どこか野暮ったくて、やさしい心ばえの青年であり、クラスの中では特に目立っていたわけでもなかった。かれは、国語、漢文であれ、英語であれ、文学に縁のある科目には熱心のように見受けられたが、実は入学したとき、かれの中にはすでに文学への志が強く育っていたようである。そのことを事実で示したのが、一年生のとき、学校で出していた雑誌「龍南」（大正10年10月）の懸賞文号に、短編小説「岐阜提燈」を本名で発表したことであった。そのあと大正十二（1923）年の末まで、かれは五編の作品を同じく本名でこの雑誌に発表している。

引用が長くなったが、ここには、地方出身の朴実、勤勉な文学志望の高校生像が誇張なく描かれている。ここで、雑誌『龍南』について説明しておく。

第五高等学校が、雑誌部、演説部、撃剣部、柔道部、弓術部、戸外遊戯部からなる総合的な校友会を結成したのは明治24年11月3日である。「その校友会の名称に就いては、種種の意見も出たやうだが、山南水北を陽と謂ふ、の古語に因んで、“龍陽”の二字を選び、秋月教授に蒙を啓かれて、遂に“龍南”と決定した⁽⁴⁾」。

龍南の文化活動の一翼を担ったのが『龍南会雑誌』である。その第1号は、次に示す主旨を掲げて明治24年11月26日に創刊された。

（略）敢テ英華ヲ大方ニ銜ハントスルニアラズ唯前途重任ヲ担ヘル同窓学生ノ切碁碁ノ機関ニ供セント要スルノミ（略）

雑誌発行の経緯を次にしるす。

『龍南会雑誌』 明治24・11・26 第1号～大正8・6・20 第171号

『龍南』 大正8・10・23 第172号～昭和19・6・15 第254号

暁が入学する2年前に、『龍南会雑誌』は『龍南』と改題されていたことになる。

〔注〕

- 1 大正8年6月23日に制定された第五高等学校学則中、習学寮関係第9章（『習学寮五十年史』）。
- 2 「忘れ得ぬ断章—芥川の『私と創作』—」。
- 3 「青春自画像」（『EDITOR』1975. 6）。
- 4 『五高七十年史』。

3. 創作活動

『龍南』第179号（大正10・9・9）は懸賞文を特集したが、暁はこれに応募して3等に入選した。ちなみに、同号の創作欄には次の3編が掲載されている。

塩 船	深川俊男
国境の人々	松村基樹
岐阜堤灯 ⁽¹⁾	徳広巖城

「岐阜堤燈」は原稿用紙35枚程度の、暁の郷里と覚しい海辺の村を舞台とした田園小説である。自然主義風の古風な描き方であるが写実描写のしっかりした作品になっている。

〔梗概〕

暴風雨で破壊された堤防工事に従事する日傭い人夫にまじって、工事用の石材を運ぶ龍吉がいた。彼は「汗水流して働いた金も、親から貰った田地も、到る所の茶店や酒屋で」無くしてしまっ、あとには大勢の子供のみが残った。龍吉は小男に似合わず力があつた。そして、今は仕事に精を出すお陰で毎日4円近い金が懐に入った。

ある日、龍吉は工事の世話人から、石の運賃について1箇につき5厘だけ引いてもらいたいという相談をもちかけられた。収入減になるこの話には、はじめは難色を示すが、間もなくある考えを思いついて快諾する。そのあくる日から、9箇の石を運搬していた昨日までと違って、「大きな石を十三も積んだ龍吉の荷馬車が、ごろごろと軋りながら、通って行くのが見えた。」

懐具合がよくなると同時に、龍吉にふたたび享樂的な気分が起つた。隣村の小料理屋に立ち寄って4日ぶりにわが家に帰ってきた時、彼の馬小屋には、片目の馬がつながれていた。同業者の仙之助と交換した馬だった。兄は龍吉がしてかした酒酔いのうえでの失態をなじり、早速行って取り返して来ようと思ふ。

あとに残った龍吉は、去年亡くなった9つになる娘の初盆の飾りの岐阜堤燈が、軒先に揺れているのを「妙に涙ぐましい心になって」眺めるのだった。

1年の3学期は2寮へ移って同郷の有光修と同室になった。暁は彼とトランプに熱中し、負けたあとは気晴しに龍田山に登つたと回想している。有光は1年、2年と落第をくり返してついに退学した。

大正11年の正月は在寮し、元旦に花岡山に登つた。2月15日には、熊本市公会堂で開かれた徳富芦花夫妻の講演会を聞きに行った。寒い雨の降る夜であつた。演題は「私どもの土産」というので、夫妻が西洋から学んできた開放的な夫婦の愛情について語り、「芦花は夫人の手を取り、肩を抱き、顔を寄せ合ふやうな仕草」で実演した。

少年の頃、暁は『自然と人生』の作者として芦花を熱烈に敬慕した。また、田園詩人の清新な自然観照は、少年の心を生彩な情感でうるおし、少年の心に詩を培ってくれた。いま、その当人に芦花の郷里熊本で邂逅したのである。

3月中旬、春休みを利用して友人と5・6日間、足摺岬方面へ無銭旅行に出かけた。この旅を素材にして書いたのが短編小説「海山」(『高校時代』昭和17. 8)である。この月、暁は2幕物の戯曲「山を焼く」を徳広巖城の実名で『龍南』第181号(大正11. 3)に発表している。

時を晩秋の1日——午後から夜にかけて——に設定し、暁の生地と推測される「四国の南の海に近い村」が背景である。

45歳の杉本吉太郎は勝手気ままなその日暮しの男である。親子で山仕事に出かけた日、三之助(三男12歳)が昼飯の茶をわかそうとつけた火がもとで他人の山を焼く。幼い三之助に代って責任を負った吉太郎は3週間の拘留の身となった。1週間もたつと「からだを持ち切れんやうになって」罰金を支払う約束で帰宅を許される。村人達の間では「お父やんが、兄やん(倉吉…筆者注)を逐ひ出したけん、其の罰があたったがちゃ」(家庭悲劇の伏線)というもっばらの評判。

金の工面に困り果てた彼は、身内の鉄次郎に相談をもちかけた。それは、昨年(の)節季に「奉公先から金のとって来やうが少い」との理由で、妻が留めるのも聞かず「無理に逐ひ出した」長男の倉吉を通じて、旦那から借金をする方法であった。あまりにもエゴイスチックな要求をする吉太郎に不満な鉄次郎も、最後には倉吉に会って話してみようとひき受ける。以上が第1幕の梗概である。

第2幕は、吉太郎、お由夫婦の対話ではじまる。お由は「色の黒い、鼻の高い男性的な女」で、力仕事では夫と同じ程の働き手である。そして、「みぞい(短い意……筆者注)一生ちゃもん」「人間と生れたからにや、ちいとは楽なこともして見たい」と望んでいる。苦労話をかわし合う夫婦の前に村の巡査が入って来て、罰金をできるだけ早く払うよう伝える。このあたりからドラマは山場にかかる。

倉吉の実母であるお由と、血のつながりをもたない継父の吉太郎との意見の衝突から、結果的にお由まで追い出すはめに陥る。そこへ、倉吉は旦那のもとを離れて九州の炭坑へ働きに出かけたという知らせをもって銀次郎が帰って来る。すべての望みを絶たれた吉太郎は「だれもかれも逃げてしまった。また陰気な、地獄見た様な拘留所が、おらの戻りを待ちよるか」と吐息をつくのであった。

暁は五高在学中、3編の戯曲を発表しているが、これは初作にあたる。戯曲への関心について「鎮西遠望」でこう語っている。

五高の時分には、私は戯曲に熱中してゐた。劇作家になりたいとすら思つてゐた。(中略) 沢田正二郎の新国劇一座が熊本へ来た時、私は生まれて初めて芝居らしい芝居を見たのだった。私は大和座の天井裏に近い棧敷に坐つて、パンをかじりながら、「大菩薩峠」や額田六福作「晩鐘」などの芝居に見入つたものだった。

さらにつづけて、

その頃の私には見るもの聞くものが、舞台の背景や効果などの種として映らざるはなかつた。私は到る所にドラマチックな詩を感じた。私は龍田口の小さな駅へ行って、その待合室に備へ附けてある新聞の綴込みを見ながら、鄙びた人たちが駅を出入りする雰囲気を楽しんだこともあった。私はその小さな駅を、一つの劇の舞台として、頭に描いてゐた。武夫原で体操の教練を受けてゐると、龍田山の中腹が切り開かれて、そこに水源地か何からしい新しい工事がはじまつてゐるのが見えた。私は工事場の建物などから、社会劇の舞台を空想して、心を弾ませたことだった。球磨川下りに行った時は、人吉から白石まで下つて、白石で舟から上ると、名高い鐘乳洞を見に行つた。私達が洞窟の入口に立つて、暗い奥を眺めてゐると、黒い被ぎ物をかぶつたカソリックの尼さんが二人やつて来た。私はそれにも、舞台の効果を感じたりした。

と、熱っぽく劇作志向を披瀝している。その口吻に20代の青年のロマンチズムを指摘することも

できよう。と同時に、ちょうどこの時期——大正期の新劇運動の動向を視野に入れておくことも可能である。

明治42年末、小山内薫らによって創立された自由劇場は、日本の新劇運動の先駆となったが、「それを中心とする多くの新劇団の叢生が、劇作に与えた新鮮な刺激は想像以上⁽²⁾」であった。大正期の簇生した群小新劇団の足跡については『日本新劇史』(秋庭太郎)が委曲をつくしている。この時期の特徴は、『スバル』『白樺』『新思潮』に拠る若手作家をはじめとして、小説家が戯曲を手がけたことである。なかでも、菊池寛、久米正雄、倉田百三、山本有三、谷崎潤一郎、武者小路実篤、有島武郎等の創作活動はめざましいものがあり、上演された代表作は好評をもって迎えられた。また、プロレタリア演劇、労働演劇も社会思潮を反映した活動を展開した。大正8年11月には互葉会(同人は東京帝国大学の学生で、これが帝大学生の実際的な演劇運動の最初である⁽³⁾)が結成され、10年には帝大劇研究会の結成をみるなど、学生演劇の萌芽もみられる。

五高在学時の暁の3編の戯曲は、庶民や農民、日雇労働者を扱っているが、このことが、当時の労働演劇の主張や、演劇の大衆化傾向とどう結びつくかについては、目下のところ判断材料を持ち合わせていない。

暁の生家は酒造業であり、父は教員や村長を勤めた人であるが⁽⁴⁾、母が農業に従事していた。また、彼の出生地は半農半魚の農村であって、すくなくとも中学校卒業までの暁は、農村生まれ、農村育ちということが出来る。しかし、高校生の暁が、農民の生活実態をどこまで識り、農村問題についてどの程度まで関心をもっていたかはよくわからない。ここで作品論を展開することはさけない。彼の戯曲に、働く者が報われない悲劇をテーマにしたものがあるが、これは、暁が人物や事件を自分の郷里に取材し、彼の誠実な人生観照と農村的性格が相まって創造した成果だと考えることはできないだろうか。

〔注〕

- 1 『龍南』(179号)44頁には「岐阜提灯」とあり、提は明らかに誤植である。「龍南会雑誌総目次」(『五高同窓会会員名簿』85周年記念号)掲載の『龍南』(179号)の頁には、「岐阜提燈」と印刷してある。
- 2 越智治雄『明治大正の劇文学』。
- 3 秋庭太郎『日本新劇史』下巻。
- 4 この点については別稿で論及する予定である。

4. 上林町の下宿

大正11年4月、暁は習学寮で同室だった有光修の世話で、熊本市上林町75番地の森山方へ下宿した。「熊本市上林町」にこう書いている。

熊本市上林町！そこは僕のベンネエムの故地だ。その物静かな町なかで、僕は高等学校三年間の下宿生活を送った。下宿の庭の隅には大きな梧桐の木が茂ってゐた。

その家のある場所は熊本城の真下にあった。現在でも、その一角は上林町とよばれている。同町と城の間を流れる坪井川には、永唐橋、新川橋、庚申橋、空壺橋、内坪井橋、坪井橋、大工橋、千葉城橋、厩橋、行幸橋など旧名、新名をまじえたさまざまな形の橋が架かっていて、いかにも城下町らしいたたずまいをみせている。上林の下宿先から程近い北西の方角にあたる内坪井町には、夏目漱石が五高教授時代に住んでいた第5番目の旧居跡がある。ところで、上林の下宿していた建物は取壊わされてなくなり、その跡には信愛幼稚園が建っている⁽¹⁾。

暁は「焼杉の下駄をはき、ズボンのポケットに両手を突っこみ、少し胸を張って、朝晩城内の道をさまよった」。ある時は、「青春時の言はうやうない孤独な憂愁に胸が締めつけられ、涙ぐみつつ歩いた」こともあった。この古城を愛した点においては、人後に落ちないつもりだと述懐している。

暁が下宿した頃、森山家には市立女学校を出て、タイピストとして大林署に通っている娘がいた。赤く肥っていて啄木の歌が好きであった。名前は夏子といった。一方、森山家の同宿者に安藤つや子とって、尚綱(しょうけい)校の1年生で13歳になる女学生がいた。暁はこの2人の女性と一緒に『梧桐の家』と題する文集を編んだ。それには、安藤つや子の童謡と自由作文、下宿の娘の啄木調の短歌、それに彼の自然主義風な作品が収めてあった。暁のは10枚ばかりの「校門際の薔薇の花」という小品で、彼の出世作となった「薔薇盗人」(『新潮』昭7.8)の原形である。

暁と同級生であった美作太郎氏⁽²⁾は、この時分の交友を次のごとくのべている。

上林町は、同じ坪井の町なかの私の生家から歩いて十五分足らずの距離であったが、私は徳広の下宿をしばしば訪れることとなった。梧桐の枝の見える静かなかれの部屋で話していると、心がなごんでくるようであり、かれの文学談を聞いていると、楽しくもあり教えられもした。かれの考え方はおおむね柔軟で、文学についても、また友だちや学校や世間のことについても、自説を固執したり批判したりするようなことはあまりなかったが、それでも度々話しているうちに好みや傾向はお互いにおのずとわかってくるのであった。そうなると、すでに「文学至上」「芸術のための芸術」といわれる方向に歩み出していたかれと、同じ文学好きであるとはいえ、「社会派」的な方向に傾斜しつつあった私との間には、何かしら噛み合わない側面があるということも、しだいに感じられるようになっていった。(『青春自画像』)

この年の10月、『龍南』第183号に「鬮の頭」(戯曲)を発表している。時は徳川時代の初めで、紀州の田舎を舞台にした1幕物の喜劇である。紀州とはなっているが、登場人物の主婦や下女、若者のことば使いは、作者の郷里の方言で書かれていて、その方面の勉強不足の欠陥があらわれている。

12月の冬休みに暁は、同期生の田尻俊介、中島光風、吉満三次郎ら4・5人で阿蘇の外輪山を越え、耶馬溪を経て大分県の中津に至る九州横断の旅に出ている。焼杉の下駄にリュックサックという姿で、熊本を出発した一行は、阿蘇盆地の内ノ牧を通り、宮の原を経て第1日目は奴留湯の宿に泊った。「湯は宿から少し離れたところに湧いてゐて、小屋掛けだった。丸石を積み重ねただけの長方形の掘り湯で、きれいに澄んではゐるが、湯の底の丸石にとまって、肩までつかっても本当にあつたかくはならなかった。身ぶるひしながら外に出た。(中略)奴留湯の空には、雪のかかったかなりの高さの山が、突几と聳えてゐた。円錐形の山膚は紫褐色のやうな枯草色で、それにばら撒くやうに彩しい雪がかかり、てっぺんはかなり濃かった。地図を見ると涌蓋山といふ山だった。」(『奴留湯』)

2日目は「深耶馬溪の鹿鳴館」に泊った。翌日は、習学寮に入ったばかりの時の同室者であった曾我憲平の生家を訪れ墓に詣でた。「耶馬溪の墓」に次のような懐想がある。

僕等は感慨無量で墓を見つめた。「爺さまが、肥後の方向けて埋めてやりましたよ。」とお婆さんが言った。学業半ばにたほれた曾我君の無念を推し量っての取り計らひだったであらう。そこに立って眺めると、四方には山が重なり、肥後の方角も勿論いちめんの山波だった。

暁は、昭和26年11月号の『群像』に「淋しき足跡」と題する短編小説を発表している。これは、曾我憲平の遺稿詩集『淋しき足跡』によったものである。

〔注〕

- 1 山崎貞士「梧桐の家—上林暁の下宿(上林町75番地)」(『日本談義』113号)に詳しい調査記録がある。
- 2 美作太郎(みまさかたろう)新評論会長。日本書籍出版協会理事。1903年、熊本県生まれ。東大法卒。著書『言論の敗北』『執筆・編集・校正』ほか。訳書にサー・スタンリー・アンウィン『出版概論』。

5. 高 校 卒 業

第一次世界大戦後のデモクラシーの思潮は思想問題、社会問題を伴って国民生活にさまざまな影

響を与えた。階級意識の高まりや、工場労働者のストライキの頻発はそれらの反映であった。大本教の不敬事件、柳原白蓮事件、首相原敬の刺殺事件、全国水平社創立大会、有島武郎の情死、婦人の解放運動など、暁が在熙した大正末期の3年間に限ってもまさに激動の時期であった。「世相の動揺が激しく、私達の心も乱れ勝ちだった。哲学者野村隈畔が、愛人とともに江戸川に投身したのも、その頃だった。東京駿河台の或る大病院の、十六かになる令嬢が、家庭教師である大学生と毒薬心中を遂げたといふ新聞記事も、私達に異常な身憐憫を与へた。そんな事件に出会ふ度に、私達は頭が病的に熱くなってならなかったものだ。」(「淋しき足跡」)

中でも社会主義思想の抬頭は、芸術界にも波及し、アンリ・バルビュスのクラルテ運動に参加した小牧近江を中心にして文芸雑誌『種蒔く人』(大正10. 2)が創刊された。反戦平和と被抑圧階級解放のスローガンを掲げた文学運動は初期プロレタリア文学運動に画期的な役割を果たすことになる。反帝国主義、反資本主義的思想傾向は、当然学園内にまで浸潤してきた。当時の学内状況を『五高七十年史』は次のように伝えている。

マルクス主義もしくは社会科学的研究が特に熾になった大正十二年以降の数年間、全国の青年学校に対して、甚大なる反映を来したのであるから、吾が校に在りても、固よりその圏外に立つべき筈もなく、それ等の思想研究の団体が生じたばかりでなく、遂には、大正十五年三月の市電争議にまで活躍すると云ふ有様で、大正十二年に起り、終戦時まで存続して居た“東光会”の如きは、その反動或は半面と見るべきであろう。

思想的左傾化が顕著になったこの時期の暁自身はどうだったか。「五高の時分には、私は戯曲に熱中してゐた。劇作家になりたいとすら思つてゐた」(「鎮西遠望」)とのべ、「昔は新劇が好きで、学生時代には劇作家にあこがれて戯曲の習作をしたこともあった」(「わが家の音楽」)とくりかえし青年期の夢を語っている。

彼は戯曲でも小説でも、庶民(「雨後」「金貨」)や漁民(「特殊部落の驕児」)農民(「鯛の頭」)もしくは下層労働者(「山を焼く」「岐阜提燈」)の恵まれない生活を描いている。このような素材の選択や人物は、前述した如く彼が生地の農村に取材したものであろう。問題はこれら農民文学・社会文学への可能性を内包した題材と創作主体のモチーフとの関連性ということになる。

この年の3月、『龍南』第185号に「特殊部落の驕児」を発表。

〔梗概〕

30歳、男盛りの庄太郎は脚気を患い、母が草履を作って得るわずかな生活費で養われている。被差別部落に生まれた彼は「永い間虐げられて、反撥しやうとする心と、ややもすれば優越を示さうとする他の人々に対する敵愾心」を抱き続けてきた。

10月半ばのある日、お寺で説教を聞く聴衆の中に、都会ずれのしたお茂を見つける。「庄太郎とお茂とは若い時分から深い仲で」女房に迎える手筈までこぎつけていた。それが、流れ者の馬喰に奪われたのである。あの時から5年の歳月が流れていた。

庄太郎がお茂の家にあられたのは夕食をすましてから、3時間あまりもたってからであった。しかし、探し求める人の姿はなく、すでに大阪に出発した後だった。「庄太郎は庖丁を右手に握りしめてゐた。こんな物まで大袈裟に用意して、女から出し抜かれた自分が忌々しかった」

報復の手段を失った彼は、今朝ほど見た豚小屋から親豚を引き出して松原で刺殺する。庄太郎は「ホッと一息ついて勝利の快感を味わうが、同時に、彼の心臓の鼓動が激しくなり「手と足が空しく痙攣を続けた。」

偶然、母に助けられたがすでに死期は近かった。「おらが、お茂に逃げられた時にや、おらァ、四方八方から、かたきを受けた。あの時こそ、おらァたまらった。今度生れかやる時に

ゃ、穢多にゃならん、貧乏にならんぞと思ふたが、大分生れかやる時期も近うなったけん、今度こそ穢多にゃならんぞ。(略) 一体、おんなじ人間ぢゃに、穢多ぢゃ、何ぢゃと言ふてゐる人の気も知れん。」

それから4・5日たった秋晴れの午後、葬式の行列がこの部落から出た。「庄太郎は今こそ、差別のない美しい国への旅に出たのであった。」

この短編小説は、これが誓われたちょうど1年前にあたる大正11年2月、『新小説』に発表された豊島与志雄の「特殊部落の犯罪」を想起させる。題名の類似性もさることながら、男女の三角関係という設定や、病床に臥す主人公が犯す罪——「特殊部落の犯罪」では女を殺し、「特殊部落の驕児」では豚を殺すという事件の相違がある——の動機などに共通点が認められる。ただ、暁の作品には、大正11年3月3日、京都で開催された全国水平社創立大会における差別撤回決議など、部落解放運動に触発されたかと思われるいわゆる「いわれなき差別」に対する被差別部落民の悲しみが底流している。

7月、第七高等学校との対校野球戦の応援団に加って鹿児島へ行き桜島へ登っている。この月の19日、5歳年下でただひとりの弟、那翁城(明治40.3.1生)が脚気衝心のため高知市の病院で死亡した。「帰郷するも三十分遅れて葬式に間に合はず。弟の死による衝撃は一生心に喰ひつく。」(年譜)

同じ月に発行された『龍南』第186号に「雨後」という題の戯曲を発表している。

【梗概】

南四国のある村の駐在巡查正木亮太は、「仕事の能率が、他の人程進まない」という理由で免職になる。彼はいぜんから自己の能力を過小評価し、役立たずの人間だと思いつめてきた。が、今度の失職をきっかけに帰郷して百姓になろうと決心する。そして、「俺は今迄あんまり卑窟だった。自分を見くびりすぎた。これからは生れ直してやらねばならぬ」と新たな希望にもえて「古臭い暮しのくっついてゐる」柱暦を妻と2人で焼くのがだった。

暁自身の意識改革の自己確認をせまるような主題である。

9月1日、関東大震災がおこった。暁は九州日日新聞社の前へ未曾有の震災速報をよく見に行つた。この災害のため、東京の桜木町の洋服屋へ修業に行っていた下宿の息子が帰って来た。婦人子供服の裁縫教授をすることになった息子のために、暁は講習生募集のピラを書いてやった。

11月の秋季皇霊祭の休日を利用して天草島へ旅行。暁の下宿に村井英雄という同宿者がいた。この人は、熊本県庁の水産技師であるがたびたび天草牛深の水産試験場へ出張しては長滞在をしていた。「私が天草へ旅行したのは、村井さんが度々天草へ行ったことから思いついたことだったように思ふ」(「上林町の下宿」)と旅の動機をのべている。暁はこの旅行中、こまめにノートをつけた。そして、この旅の体験を素材として昭和8年11月の『新潮』に発表した作品が「天草土産」である。

年譜によれば、11月に島原温泉嶽に登っている。五高時代の暁は思いのほか行動的で、鞍ヶ嶽や八方嶽などにも登山している。

12月、『龍南』第188号にコミックな短編小説「金貨」を発表している。在学時代最後の作品となった。暁は五高卒業後、1編の回想文を寄稿している。『龍南』第238号(開校第50年記念特輯 昭和12.10.30)の「耶馬溪の墓」である。

暁は冬休みに帰省した。大学進学について父と相談するためである。それは、相談というより、ほとんど説得に近いものだった。暁は大学は文科へ進むことに決心していたから。父の「やりたいと思ふことをやるがええ」(「卒業期」)という理解を得て、冬休みが終ると宿毛、宇和島、佐伯をへて熊本に帰った。

大正13年3月、第33回の卒業式が済美館で挙行され、文科甲類100名の生徒が卒業した。暁は23

歳であった。「朝早く、まだ暗いうちに、私は人力車に乗って、門口に送ってくれた下宿の人達に別れを告げた。人力車は、開通したばかりの電車道を伝って——加藤神社横の新しい切り通しを抜けて未明の上熊本駅に向った。」(「上林町の下宿」) 暁が熊本を去ったのは3月22、3日頃である。

〔付〕資料の提供・調査について便益を賜った熊本大学附属図書館・五高同窓会・熊本県立図書館に厚く御礼申し上げます。

(昭和52年8月17日受理)

(昭和52年10月25日分冊発行)